

詩同人誌評

第16回

生きることと 生活することの違い

中塚 鞠子

詩誌には詩集と違った新鮮なものが散らばっている。それを見つける楽しみを私はいつも、あじあわせてもらっている気がする。

昔、詩は若者の文学だといわれた。そうだろう。確かに夭折した詩人に、いい詩人が沢山いた。医療が進んでない当時、貧しくて、あるいは結核や病気で亡くなる人、戦争で戦死した人などが多かった。今、健康年齢の平均値さえもその頃とは20年は違う。老いていく者にとって、しかしながら、毎日が未知の世界なのである。指が動きにくい、歯がぐらぐらする、腰が痛い、立ち上がるとなぜかふらつく。そんなことだけではない。いま、かつて経験したことのない世界が展開している。「生きる」と生活することの違いが解つて来るのはそんなに早くはない。二十歳の若者にくらべて八十歳は経験値が違うのだ。だ

から、歳をとったからといって臆することはない。堂々と詩を書き続けられたい。

玉井洋子「空蟬」(「ア・テンポ」68号)

雨粒が穿ったほどの
小さな穴に
少しずつ
見えなくなっていく
羽

一枚

ひざかりの
乾いた風に
墓標のように立ち
失くした頭の行方を
問うている

短いので全文紹介した。蟬の死骸はすでに解体されたのか、羽が穴に運ばれていく。その羽が墓標のように立って、という表現が活きていて、なくした頭を探しているのは、作者であり蟬自身であらうと思わせる。

余計なことを全く書かないでこれだけで蟬の一生と自然の当然の過酷な成り行きを書ききっている力量は大したものだと思う。

ただタイトルの「空蟬」は、はかなさを出す効果はあるけれど、実際は蟬の抜け殻であ

るから、タイトルとしてはどうだろう。

蜃気楼「何故、我々は生きているか」(「軸」158号)

○25／脱出／アッヘー25
マイネー／脱出／ダツソー
ノー連／脱出／ワツシャー
ロート／フライングパウダー
記憶のうちに
ダウト／イツツノット／さつと
ポーっと／脱出25／ダツシユ

この謎のような詩はなんだろう、といういろ考えてみた。マイネーは秋田弁の駄目だということだろうか。2025年逃げ出そう。脱走だ。いやいや、どうしよう、そうじゃないんだ。悩みながら結局、ダツシユで脱出だ。となったのだろうか。

ひよつとすると、前詩「ナマケモノ」の続きで書かれた詩かもしれない。布団の中から出られない、今日はゴミを出す日。面白い詩になったものだ。が若者の詩ではなさそう。

以倉紘平「遠い国」(「アリエ」230号)

僕が死ぬとしたら
バルコンを開けといってくれ

子どもがオレンジを食べている
バルコンからそれが見える

農夫が麦を刈っている
バルコンからそれが見える

(略)
三十八歳の若さでロルカは死んだ

(略)
病床で書かれた与謝野晶子の歌稿ノートが

発見され
彼女の絶筆

わが立つは十国峠 光る雲 胸に抱かぬ

山山もなし

が掲載されている

(略)

歌人は開けられたバルコンから

わが日本の 雲の棚引く雄大な美しい山々
を見たのである

(略)

しかし

戦後を生きた

わたしのバルコンからは

何も見えない

久々に以倉紘平の長い詩にお目にかかった。
長い詩なのでとびとびの抜粋になったが、ス
ペイン戦線で独裁者フランコ將軍に銃殺され

たロルカの詩と、大東亜戦争勃発の翌年昭和
十七年の元旦を記念した晶子の歌を取り上げ
ている。太平洋戦争で亡くなった沢山の無辜
の人たち、祖国のために闘った兵士たち。

彼等のバルコンからは

へ懐かしい故郷が／父祖の家が 水辺で遊ぶ
こどもたちが／ひばりの上がる田畑が／晴れ
渡った山々がよく見えていたに違いないと
以倉は悲しみこめて綴っている。

佐伯圭子「詩の日記」(「Messier」66号)

某月 某日

何をこうして返されているのか

気味悪いクラゲを投げられ

固すぎる石も投げられ

今日はその人の命をつなく

食べ物 薬を求め

道を急ぐ

某月 某日

壊れていくあなたの傍 衣を畳み

ふつふつものを煮る

閉じこもる日々

何をこうして返しているのか

噴水の側で

吹き出る水を

見ていたこともある

或る一日、一日を綴ったものであるが、こ
うした詩を読んでいると、じわじわ伝わって
くるものがある。口に出せないものが日常生
活をだまつて綴ることで伝わってくる。本人
の実生活か、誰かの生活なのか判らないが、
それは問題ではない。切羽詰まった緊迫感、
閉塞感、これが詩でなくて何であろう。

徳沢愛子「おい おい」(「笛」310号)

肉体を大鏡に晒して 入浴

(略)

浮き出た淋し気な鎖骨

地球の引力に負ける垂乳根

段だらけの腹部 五人も産んだんだもの

二の腕の揺らぎ 風前の灯

(略)

体勢を立て直す

ザブリ湯舟を出す

小太りのなかなか立派な体ではないか

尊厳の礼服を着る

浄められた白々とした肉体に

号令をかける

大昔 教師から叱咤されたあの号令

起立！ 礼！ 着席！

(略)

おととつとつと やめなさい

また 神経痛が起きる
ゆるゆるが 一番

老いを自虐的に、ユーモラスに描きながら
読む者には、いやいや、まだまだ立派な肉体
が想像される。一喝されたようで元氣が出る。

古川田鶴子「家屋侵入記」(「百花」三号)

体操教室に行つてます 介護保険の老人向
送つてもらつて礼をして

靴の中に鍵がない
どこで落した鍵ケース

見つけ難いと考えて

もしもあればと スマホで電話

落ちつけ落ちつけ 自分に言い

洗面所しか入れない

鉄の脚立を窓際へ エッチラオッチラ休み
つつ

窓の下まで運んだが

脚立の段では跨げない

(略)

迷惑少なく暮らそうと

思ふばかりに無理をして

かえつて迷惑かけている

100歳越えたから

もっと人に頼らねば

(略)

脚立の最上段から窓をまたがり、飛び込ん
で頭を打つたという。介護施設から鍵が届い
た時にはすでに家の中に居た。反省しきりの
驚くべき元氣な100歳の自宅侵入記である。ど
うしてどうして、元氣な100歳。頼もしいけれ
ど、お氣をつけください。

本千加子「探しもの」(「軸158号」)

ものを捜しに行つて

はて、何だっけ?と思うこの頃

そんな時、意外なものを見つけて帰つて来
る

人生も同じようなもの

探し物が見つからなくても

別なすてきなものが見つければいい

思いもかけない出会いや喜びが
みつければいい

間違いなく、歳をとつてくると探しものが
増える。何とプラス思考の人だろう。一生楽
しく暮らせること請け合ひだ。

尾崎義久「葛藤 日々 カットウ」(「飛脚」
53号)

なぜ葛藤しているのか。一九五五年創刊70
年という同人誌「潮流詩派」が休刊という名
の終刊になったからである。創刊者の亡き村
田正夫さんの後を継いで奥さまの麻生直子さ
んが発刊を続けていた立派な総合雑誌ともい
える同人誌であった。麻生さんが倒れたのだ
ろうか。大勢が路頭に迷つたのだろうか。
44年間同人だったという作者の葛藤の日々
も想像できる。しかし、その後七人で「漂
流」という名の船出をしたようだ。どこへ行
き着くか、漂流もまた、なかなか楽しそうだ。

井上良子「雨あがりに虹が立つように」
〔Rosat 2 kernel〕11号)

せんそうは まだ生きているから

あなたも いのちの先端で いまを生きて

いるから

あなたのいのちに つながるひとの 戦争
のはなしを 聞いてほしい

(略)

八月六日 真夏の盛り 朝八時十五分 ピ
カッ

日本晴れ 核兵器は 独りごとのように落
ちてきた

(略)

大晦日までに 十四万のひとびとが死んだ

男は死体の山につまれた 喉にあいてしま
った穴から もれた息で

生きていると助け出された

二十一歳 爆心地から一、八キロ 写真の
現像が任務

(略)

男は生きて 父親になって わたしに良子
と名づけた

(略)

被爆手帳を持つのを嫌がり 血を吐いて
黄色くなって

雪のふる日に死んだ 雪はふりつもった
(略)

祖父の弟敏夫はベルトのバックルだけを残
して黒焦げ。敏夫の娘の信子は熱波を浴びセ
ーラー服のまま、信子の兄は母を探しに行っ

て倒れた。十三歳で。子を探して母も焼跡で
死んだ。原爆ドームの川向かいの写真館に嫁
いでいた祖父の妹は、まるで何も残っていな
い。無念の思いは明るい町の地の底で震えて
いると書く。『日本児童文学』からの再録
死者の数は数字である。が、こうして家族、
親戚たちの顔が見える描写は直接胸を突く。
今も続いている戦争を考えるいい機会だ。
詩誌の中には詩だけでなくいいエッセイも
沢山掲載されている。

坂多登子「最近読んだ本から⑦『ふたつの夏』
〔天国飲屋〕8号」

谷川俊太郎と佐野洋子による唯一の合作小
説。二〇一八年に新装版が出たという。冒頭
の作品「釘」が紹介されている。読まれた方
も多いと思うが私はまだ読んでいなかった。

山荘の持ち主の学者の息子の健太郎を谷川
が書き、山荘の管理人の自然児の女の子を佐
野が書き、日記形式で書かれたものだ。女の
子の名前が最後まで出てこない。二人の役割
があまりにもピッタリで、「生きることと生
活すること」の違いに気づかされる。
読んでみたくなる紹介になっている。

近藤洋太「歷程と草野心平

——「銅鑼」と戦前の「歷程」を中心に

昨年評伝『草野心平』を砂子屋書房から出
した著者が、九十周年という「歷程」の長い
歴史を振り返って書いたものである。一九二
五(大正十四)年、草野心平が留学先の中国
嶺南大学でメンバー五人と創刊した「銅鑼」
に始まる。三号から坂本遼、高橋新吉が、四
号から宮沢賢治、三好三郎というふうに、
岡本潤、小野十三郎などが加わっていく。最
終二十人ほどになり、十六号(二八年六月)
で終刊している。

「歷程」の創刊は一九三五(昭和十)年四月。
創刊同人は菱山修三、岡崎清一郎、高橋新吉、
逸見猶吉、尾形亀之助、中原中也、宮沢賢治、
土方定一、草野心平の九人である。

その後、時代の流れの中で再創刊、休刊、
復刊を経て、いろんな人材を出しながら、現
代に至っており、「歷程」の特徴の変化など、
なかなか詳しいことなどは同人でない限り知
り得ないので非常に参考になった。

清水博司「長谷川四郎ノート①⑥

——北京ベルリン物語(一)「飛脚」53
号

長谷川四郎の「北京」が『文芸展望』に発
表された時の題名は「周作人と日本人」であ
った。

『日本文化を語る』を筑摩書房から出した周作人は魯迅（周樹人）の弟であり、日本軍が北京に（入城）した際、北京大学に残った教授の中の一人であった。周作人は兄魯迅を追って日本に留学し、魯迅帰国後も日本に残り、日本女性と結婚し、日本に関する論文・エッセイを書いているが、当時の日本に対する思いが読みとれる、と長谷川四郎は書いている。周作人は、日本の中国への侵略、中国革命の時代にあつて、日本のファシズムを何とか理解しようと試みている。

一九三六年周作人は北京にとどまり日本の「尾久事件」と「鬼怒川事件」について書いている。日本では「尾久事件」は「阿部定事件」、「鬼怒川事件」は遊女と運転手の心中事件として新聞には単に同情的な記事が一回出ただけであつたという。作人は（北京にあつてこの事件の異様さに気がついた）周作人は異様さに気がつくほど「正常だったのだ」と長谷川四郎はいう。女性を性行為の労働者として売り買いうる国家公認の売淫制度に視点を当て、問題提起したものであつた。

書いたものを見るかぎり、日本への追従や迎合はなかつたが、日本降伏後、周作人は戦犯として逮捕され、懲役十四年の刑を受けた。奥さんは日本人であつたことも加わつたのかもしれない。日本では魯迅ばかりが目立つが、周作人の著作も読んでみたいと思つた。清水

博司の「長谷川四郎ノート」はぜひ続けて読みたくなる作品である。

砂川公子「歌い継ぐ『紫金草物語』」（「笛」310号）

「紫金草」は「諸葛菜」とも「紫花だいこん」ともいわれ、大根の紫色の花のような優しい可憐な花である。それを見た砂川さんは、そのいわれと日本にきた由来を書く。

一九三〇年代、日中戦争従軍時、陸軍兵（薬学者であつた）の山口誠太郎さんが、南京の紫金山に咲く紫の菜の花と出会い、鎮魂と平和への願いを込めて、日本に種を持ち帰り「紫金草」と名付け、全国へ広められたとか。大門貴子さんが二胡の独奏で始まる、合唱朗読構成の組曲「紫金草物語」を製作。

それが南京公演を皮切りに、台湾、ニューヨークと広がり、昨年「金沢紫金草合唱団」は25周年コンサート「不忘歴史 面向未来」を行ったそうだ。「南京大虐殺記念館」の花園にも紫金草が咲いていたという。

下前幸一「イムジン河のほとりにつ」（「RIVIERE」）204号）

イムジン河を渡り、対岸のDMZ（非武装地帯）を歩く。鳥頭山統一展望台から北朝鮮

を見て、著者は自分に問いかけている。「希望はどのように見えるのだろうか」

イムジン河がはらむのは、韓国と北朝鮮との分断と対立だけではなく、それは私たち日本人の胸元にも向けられた問いなのだと思う。おそらく深い歴史の奥から問いかけてくるもの。そして、私達の将来への問いかけであるのだろう。

【受贈詩誌】

ご贈呈有難うございました。

「ア・テンポ」68号・「アリゼ」229・230号・
「KAIGA」130号・「gaga」30号・「GAGA」94号・
「CROSS Road」26号・「呼吸Ⅲ」1号・
「さんが」15号・「軸」158号・「玉蘭」12号・
「潮流詩派」283号・「月の村彦番地」18号・「天国飲屋」8号・「飛脚」53・54号・「百花」3号・
「笛」12号・「ほとり」80号・「三重詩人」272号・
「Messer」99号・「夜凍河」26号・
「RIVIERE」203・204号・「歷程」622号・
「Rosa & Kernel」11号